【卒業生は今・『公共空間』通巻第十号記念企画】

京大公共ＯＧ特集

本誌編集委員

京大公共政策大学院修了生の進路は多岐にわたる。

『公共空間』では毎号「卒業生は今」と題し、各方面で活躍する修了生を紹介してきた。しかし、これまで多くのＯＢに取材を行ってきた一方、本学ＯＧを正面から取り上げることはできなかった。そこで『公共空間』通巻第十号を記念した特別企画として、今日、全国で活躍するＯＧ四名へのインタビューをリレー形式で紹介する。多様な進路のうち、今回は公共部門、民間部門、報道部門で働く三名のＯＧと、新社会人となる二〇一三年春の修了生から話を伺うことができた。

■ 公共部門で働く

西村晃代さん（二期）は黎明期の京大公共の修了後、京都府庁に就職した。公務員志望者は公共政策大学院で何を学ぶことができるのか。就職し学生生活を振り返るとき、今ならその意味を理解することができる、と語ってくれた。

入庁以来どのようなお仕事をされて来られたのですか。

「乙訓土木事務所の総務契約室というところで、管内公共工事の入札、契約、支払という一連の業務と、建設業者の許可を出す仕事をやっていました。『土木事務所って何？』ってなると思うんですけど、土木事務所は技術屋さんばっかりの職場なんです。技術屋さんっていう、その工事の監督をする技師さんがいて、私たちみたいな事務屋さんが事務関係のお手伝いをしている感じで。扱うのは府道とか、河川とか。

最近の大きな案件は、第二外環状道路って知ってはります？そこの供用開始がちょうどこの四月からなんです。その本体工事はＮＥＸＣＯがやっているんですが、その側道整備は京都府の乙訓管内所管事業なので、二四年度は入札件数が多かったです。

四月からは異動で健康福祉部健康福祉総務課というところにいます。全く違う分野で、一から勉強の毎日です。」

土木という専門性の高い分野で苦労されたのでは。

「事務職の仕事って分野よりは性質なんですよ。契約とか、入札とか。そういった意味だと、土木にもいろいろな専門用語があるんですけど、事務屋さんに求められるのは性質だと思います。もちろん技術屋さんの仕事内容を知っているに越したことはないんですけど、わからないことはその都度聞いて。そこは役割分担です。」

京大公共黎明期の様子はどのようなものでしたか。

「雰囲気としては、今とそう変わらないんちゃうかな。みんながやりたいことをやっていますよね(笑)。自主活動のインゼミが始まったというのが、大きかったかな。最初はここと立命館とで何かをしようとしたのが始まりで、第二回から今のような合宿形式になったと思います。ひとつ上の代の先輩たちが中心でした。

あと、この『公共空間』も始まったんとちゃいますか？最初はこんなに分厚くなかったなぁ(笑)。黎明期ってうまい言い方ですね。当時はまだこの大学院の就職の実績も不明だったし。自習室も私たちの時に二つになったんですよ。

公務員試験勉強はどのようにされていましたか。

「入学前から漠然と公務員になりたいと思っていたので、民間はエントリーシートをちょっと出す程度でした。志望は、国と地方を併願している中で、ある分野に特別進みたいという思いが強くなくて、最終的に京都府で採用が決まりました。就職して三年たった今では、地方公務員だからこそ幅広く色んな分野に携わることができるので、良かったかなと思います。苦労した点と言えば、公務員試験と授業というより、民間の就職活動との兼ね合いが難しかったかな。周りが徐々に民間の内定を得ていく中で、試験勉強をがんばりたいのに、焦りも出てきつつ、本命ではないけどやらないといけないというしんどさというか…。」

西村晃代さん。京大公共ディスカッションルームにて。

公務員志望者にとって公共政策大学院で学ぶ意義は何でしょう。

「公務員として働く上で、公共政策大学院卒って大きいと思います。職場によると思いますけど、学部卒の子とは少し違う扱いで見られることもあるし、むしろ公共の卒業生としてはスタート地点から違うのだという気概を持ってないといけないと思います。佐伯英隆先生が、卒業時に『誇りを持ったエリートになるように』とお言葉をくださいましたが、まさにその通りです。確かに、活躍したいなら、少しでも早く現場に出て経験を積むべきという考えもあります。でも実際に公務員になって公共政策大学院での経験を振り返ると、ここで学んだ内容が仕事で役立つのはまだまだ先かな、と思っています。

まだ職場でも一番下っ端ですし。でも知っているかどうかで仕事の進め方も変わるし、分野横断的なものの見方ができる。少なくとも、組織の中で自分の意見を言い続けることができるのが大きいと思います。在校生へのメッセージとしては、やっぱり『自主活動やインターンをがんばれ』って伝えてください。勉学ももちろんですけど、やっぱり自主活動からも得るものは多いと思います。この取材みたいにOB・OGとも繋がれますしね。またインゼミ合宿にも呼んで下さい。」

■ 民間部門で働く

高橋己代子さん（四期）は、アクセンチュアに勤務する。「京大公共政策大学院に進学したことが大きな転機だった」と語る彼女に、コンサルティングの奥深さと醍醐味を聞いた。

京大公共に進学した経緯や、京大公共に来て感じたこと教えてください。

「もともと名古屋大学の法学部で国際政治を専攻していて、研究者になろうとしていました。当時は名古屋大学の研究科に進もうとしていたのですが、たまたま同じ学年の友達が、東大公共を受けて、それなら自分は京大を受けてみようかなと思って。結局、名大の研究科と京大公共政策の両方受かって悩んだんだけど…。京大に行ったら研究者の他にもいろいろ可能性がありそうだと思いました。名古屋に残ったらそのまま研究者になっていたと思う。名古屋にいるとき民間への就職は全く考えてなかったし、周りにも国Ⅰを受ける人もいなかった。京大公共

に来て初めてコンサルティングという言葉を知ったし、『京都に行ったら可能性が広がるかも』、という考えは結果的に間違っていなかったと思います。実際に京都に来たら、みんな好き勝手なことやっていて、とても居心地が良かったです。」

経営コンサルへと進まれたきっかけは何だったのですか。

「私の時は、修士一年の五月時点で就活を考える人は考えていました。そのころ私はまだ若干研究者にも未練があったりして、どうしようかなってと思っているときに、一つ上の先輩に『コンサル向いているんじゃないか？』と唐突に言われて、『え、コンサルって何ですか』、というのがきっかけです。

それで何も分からなかったから(笑)、ネットや、本でいろいろ調べてみたら、いろんな企業があるんだなと思って。あと、一つ上にコンサルに行った仲の良い先輩がいたので、話をよく聞いていました。それでおもしろそう、これいいかも、って。その時にもう選考に直結する夏のジョブとか、インターンとか始まっていたから、行けるようなものは夏のうちに行っていて、アクセンチュアの内々定が一番早かった。それで、就活は一応終わりました。」

大学院生としての、あるいは公共政策大学院生としての民間就活はどうでしたか。

「私の場合は基本的にコンサルしか受けてないから他の業界のことはよく知らないんだけど、圧倒的にコンサルティング業界は大学院卒が多いと思う。日系企業だと学部生の方が有利だったりするけど、コンサルティング業界では文系院生だからしんどいということはなかった。あと、公共政策大学院生としての就活についてだと、周りは『どうせ公務員になるんでしょ』って面接で言われて苦労していたみたい。でも私は公務員試験を全く受けていなかったから、公務員との併願で葛藤したり面接で説明に苦労したりするという経験はなかったかな。面接で聞かれたときは『政治学やりたかったから大学院来ました』って正直に言えば良かった。」

現在のお仕事はどのようなことをされているのですか。

「難しいなぁ。私も入るまでは何しているのかよく分かってなかったから(笑)。今は、サステナビリティサービスというところにいて『企業や国とか、ひいては全体の持続可能性を追求するお手伝い』と対外的には説明しています。さらに一段下げると、スマートグリッドやスマートシティ、電力改革など環境対策、企業のサプライチェーンの効率化とか。スマートシティ関係のプロジェクトで、日本国内や海外でスマートシティをつくる計画に片足を突っ込んでいたりします。サステナビリティって説明が難しい（笑）。いつも説明に苦労して、『環境っぽいことをやっている』と言ったりしています。」

高橋己代子さん。有楽町の喫茶店にて。

「一応定義は『単なるスマートシティとか省エネだけでなく、経済・環境・社会のトリプルボトムラインに効くような、革新的な手法を取り入れていくこと』で、このような取り組みを支援しています。」

在校生・京大公共志望者へのメッセージをお願いします。

「ここまでサービス産業化された職種にいると、もはや男性とか女性とか関係ないと思う。もちろん男性の方が体力はあったりはするけど。後輩へのメッセージも女性だから、女子学生だから、ということは置いておいて、まあ、やりたいようにやればいいと思います（笑）。うまく行く人は行くし、行かない人はまた頑張ればいい。就活に関して言えば、『この企業がめっちゃ好き』と思うことができれば、相手にも好きになってもらえるんじゃないかな。そう思い込んでいれば相手にも伝わるし、話も弾む。人も会社も、『好きかも』と思っていれば、いろいろうまくいくのでは、と個人的には考えています。」

■ 報道部門で働く

現在、西日本新聞に勤務する川口史帆さん（五期）は昨年度まで『公共空間』の編集委員だった。現在の勤務地である佐賀県警本部の記者控室で、『公共空間』の思い出や、報道に携わる者としての想いを聞いた。

現在のお仕事内容について教えて下さい。

「多くの新聞社がそうだと思うんですけど、新人や若手のころに経験する、警察担当です。

川口史帆さん。佐賀県警本部の記者控室にて。

どういった仕事をするかというと、何か事件や事故が起きたときに、警察から回されてくる広報文があるんですけど、それだけでは記事にできないので、事件を管轄している署に聞いたり当事者や関係者に聞いたりして原稿にする。警察からの広報の前に現場に行って取材することもあります。

例えば『あそこでなんかやっとるらしいばい』っていう噂を聞きつけたりした時とかに、現場に行って写真を撮って、何が起きているのかを確認して、それを記事にする。聞いて書く、聞いて書く、の繰り返しですね。

普段の取材や、それ以外のいわゆる『夜討ち朝駆け』とかで、警察署や県警本部の警察官と親しくなることも仕事の一環です。公に発表してないことをこっそり教えてもらったり…たまにそれが記事にも繋がります。

もちろん、警察以外にも街なかの話題や季節ものを取材したり、自分の興味のあることを取材してみたりもしています。」

記者を志望するきっかけなどはあったのでしょうか。

「私の中学校が荒れていた影響で、大学に行く時には教師になろうと思っていました。でも、学校を良くしたいなと思って勉強を進めていくうちに、教師だけがどうこうできる話じゃないな、根深い問題は地域社会にあるなと思って。じゃあどうしよう、と。いろんなアプローチがありますよね。行政は…私、勉強が苦手で…（笑）。あと自分が公務員として働く姿を想像できなくて。それで記者はどうかなと思いついたんです。文章書いたり、人と話したりするの好きだしな、『こういう問題が地域にある』とか書くことで、行政を変える一助になるのかな、と思って。社会のどの部分に携わりたいか考えた時、自分に一番合っているかな、と。

京大公共の入試では鈴木基史先生と小野紀明

先生に面接をしてもらったんですけど、その時にも『西日本新聞に就職したいです』と言っていました。『地元に戻ってピンポイントで情報発信したい』と答えたのを覚えています。」

そういった意識から『公共空間』に所属されたのですか。

「ちょっと息苦しかったんですよ、京大公共に入ったは良いんですけど(笑)。みんなそれぞれに目標を持って自分の勉強を一生懸命していて。それはすっごく魅力的で『わあ、すごいところに来たな』と思ったんですけど、だんだん縦割りというか、それぞれが見ているものが狭い社会を築いている面があるなと思って。その中で『公共空間』はなんだか自由で、面白いことができると思ったんです。確かに見下されたり、『変な集団』的扱いを受けたりすることもあったけど(笑)。でもこの業界に入って思うんですけど、社会におけるマスコミも、そういう扱いを受けることが少なくないんです。

事件で被害者の関係者にお話を伺ったり、自分の専門でないことを素人として聞きに行ったりしなければならないこともある。『ああ、記者さん?』って感じで白い目で見られたり、鬱陶しがられたりすることも珍しくない。それでも少しでも勉強したり、工夫したりして『こういう話を聞きたい』『これってなんですか』って食い下がる。記者って自分で天下国家を語る訳ではなくて、そういったものを語る人から、どれだけいい話を引き出せるかが大事なんじゃないかと思うので…。

そういった意味で『公共空間』はいい訓練になったと思います。私、エネルギー政策の取材で『公共空間』の皆さんに多大なる迷惑をおかけしまして…。『これ書きたい!』と嬉々として取材しても、相手に『そんなことも知らないの?』って言われて、自分の無知に気づく…そっから視野が広がる。そういった経験は京大公共でも『公共空間』だから出来たんじゃないかなと思います。」

■ 新社会人として働く

山城藍さん(六期生)はこの春に京大公共を修了し、メディアへと就職する。修了式を数日後に控えた彼女に、京大公共での二年間の思い出と、新社会人としての抱負を語ってもらった。

ご卒業おめでとうございます。京大公共二年間を振り返ってみて、いかがですか。

「学生というよりは、学生と社会人の間のような…、いろんなことを経験させてもらったな、というのが、一言での感想です。公共政策大学院ならではだと思うけど、学問を実社会にどのように活かすかを意識している人が多いという印象でした。実際を見ているということが、高く評価される場所だと思います。私は学部時代には法律しか勉強してなかったから、社会に出る前にもう少し知らない世界を見たいという思いもありました。京大公共に来たのも、もともとの関心が教育政策と文化政策にあったからなんやけど、それ以上に『面白い人がたくさんいそう』と、環境に魅かれた部分が大きかったと思います。

それで、実際に入ってみて、思っていたより

山城藍さん。京大公共エントランスにて。

もずっといろんな人がいる、と思いました。社会人学生との関わりは、何よりも、『働くってすごいことだ、大変なことだ』と考えさせられました。」

自主活動ついての思い出や、苦労した点などはありますか。

「自主活動は映像制作がメインでした。私たちは本当に素人だったので、時間もかかったし、編集ソフトをどれにするか、テーマをどれにするか、何もわからず苦労しました。私は福島の風評被害を取り扱ったんやけど、取材先にかなり怒られて、何とか完成に漕ぎ着けたという印象です。

自主活動では『実際を見に行くということ』の意義を痛感しました。福島の取材のとき会津若松を訪れたときに『がんばろう東北』というのぼりが無数に立っていて、でも人は閑散としているという光景にすごくショックを受けました。今まで何も知らずに机で勉強していたのか、と思ってしまう。そういった経験が、メディアを志望する動機付けにもなったと思います。」

今後の京大公共政策大学院に期待することは。

「京大公共は入試科目も多様で、いろんな人が進学しやすい環境やし、そうやなぁ、期待としては…、修了生の進路がもっと多様になればいいと思います。公共政策大学院で学ぶマインドは公務に就かなくても活かされるべきと先生方もおっしゃっていますし、私もそう思う。この大学院で学ぶ志を持った人がいろんな分野にいれば心強いし、京大生がいつまでも『公共を担うのは公務員だけだ』考えているのはちょっと変かな、とも思う。」

いよいよ一週間後には社会人です。抱負をお聞かせください。

「私、早く働きたい(笑)。どうすれば京大公共での勉強が活かせるのか、行ってみないとわからない部分も多いと思う。私は内々定してから一年以上あって、その間自分が社会で何ができるのか、何を目指すのか、ずっと考えていたので、『待ちわびた』って感じです(笑)。」

◆ 所感

彼女たちに限らず、京大公共で学ぶ者にはひとりひとりにストーリーがあり、ドラマがある。東京、佐賀、京都と全国で活躍するOGを訪ねた本企画は、結果的に、OGという切り口から、京大公共の修了後の進路の多様さと、その根底にある、多様な人的資源を尊重する本大学院の意志を再確認するものとなった。

ところで、同じような質問に対しても、それぞれ個性的な回答をしてくれた彼女たちが、唯一、口を揃えた答えがある。「女子学生として、京大公共で学んだ感想はどうか」という質問に対してだ。彼女たちは言う。「女子学生だから、という考え方はしたことがなかった」と。

（聞き手／文責　山本剛）

世に人「財」を送り出し続ける、京大公共政策大学院。